たうんとぴっくす

まちの話題や出来事を紹介します

このマークの記事は、関連写真を「市公式フェイスブック（FB）」で公開しています。

▲観光客に人気のパネルとなっています。

本物そっくりの石垣が登場

安来市立歴史資料館にこのほど、月山富田城跡の石垣パネルがお目見えしました。石垣がある山中御殿まで行けない人に楽しんでもらえるよう市観光協会が製作。大きさは概ね縦 2m30cm、横 3m あります。パネルの前で写真を撮ると実物の石垣の前で撮ったような迫力のある写真になります。

同館の平原金造館長は「幅広い層の人に月山を楽しんでもらえるものができました。石垣まで上がる時間がない人や体力的に登るのが難しい人に雰囲気を味わってもらえます。これを機に今後も多くの人に来場いただきたいです」と話していました。

スポーツ少年団員の指導を長年にわたり従事し、功績のあった６人（当日１人欠席）が安来市スポーツ少年団本部長から表彰されました。（6 月 17 日：安来中央交流センター）

今月の一枚

◀メンバーの意見をしっかりと聞きながら話し合いを進める参加者。

地域で活躍できる人材を育てる

個人のスキルアップや地域での実践活動を応援しようと「やすぎチャレンジ塾」を 6 月 13 日、防災研修棟で開催しました。

地域活動は一人ではなく、複数人で行うものであることから、チームでの参加を募集。10 代から 70 代まで 7 チーム 29 人が参加し、「（一社）小さな拠点ネットワーク研究所」で地域づくり支援を行ってきた檜谷（ひのきだに）邦茂さんから地域づくりの考え方やノウハウを学びました。全 6 回のスケジュールで行う初回の内容は、「地域づくりの楽しさ」がテーマ。受講生は取り組んでみたいことを書き出して、地域で自分がどのようなことを楽しいと感じているかや、何を大切にしているのかを確認しました。

檜谷さんは「地域づくりには個々の違いを生かせるチームワークが必要。自分や仲間が大切にしていることを尊重しながら取り組んでいくことが重要です」と話していました。

同塾は、今後、１～２カ月ごとに講座を行い、受講生が地域で充実した活動ができるようレベルアップを図っていきます。

川遊びで地元の自然を満喫

地域にある自然の良さを知ってもらうため６月29日、嫁来い観音・婿来い地蔵前の山佐川で川遊びが行われました。

参加した山佐小学校の児童12人は、水中眼鏡で川の生き物を観察。たもを使って「ぼっか」や「たにし」などを捕まえていました。

同校５年生の鴨木彩羽（いろは）さんは「地域の川に住む生き物を観察できてよかった。川は冷たかったけど、友達と水の掛け合いっこをして楽しかった」と話していました。

◀川の生きものを観察した後、水を掛け合って遊びました。

災害時の廃棄物処理協定を締結

市と三光株式会社は、６月26日、「災害時における廃棄物処理の協力に関する協定」を締結しました。この協定は地震や水害、新型コロナウイルス感染症などの災害を想定。市が管理、搬入している施設で廃棄物の処理が難しくなった場合でも迅速に処理することができるようになります。

三光株式会社の三輪昌輝代表取締役社長は、「災害発生時はさまざまな種類の廃棄物が発生します。今回の協定が、市民生活の一助になれば」と話していました。

◀三輪代表取締役社長（右）と近藤市長。

市特産ドジョウ、大きくなーれ

やすぎどじょう生産組合が、ふ化させたドジョウの稚魚を６月11日に養殖農家へ引き渡しました。養殖農家は引き取った後、自身の休耕田を利用した養殖池に放し、出荷サイズになる約３カ月間、育成します。

同組合仙田拓也事務局長は「今年は新型コロナウイルスの影響で、目標生産量を例年の約半分の2000キロに調整しています。緊急事態宣言解除後から少しずつ市内飲食店から注文があります」と話していました。生産したドジョウは、３分の２を全国の飲食店に、残りを市内飲食店に出荷されます。

▲体長約１cmの稚魚を袋に仕分けする同組合職員。持ち帰った各農家は10cmまで成長させます。

足踏み式消毒スタンドを製作

手押しアルコールポンプを足踏み式にするための木製器具を布部交流センターが考案・製作し、６月25日に市へ寄贈しました。

器具の名前は「布っと部～（ふっとべー）」。新型コロナウイルスが「ふっ飛べ」と地区名の「布部」、足の「フット」にちなんで名付けられました。

本体はタモ材や布部の杉、古いタイヤのチューブなどを活用。タモ材は野球のバットの素材として利用されているもので、重さが約７キロあるため、しっかりとした作りとなっています。

器具は、市役所、認定子ども園布部、布部小学校、広瀬中学校などに設置しています。

▲使用方法を説明する小藤昇館長。